

# 輸入超過 に突入した 日本の貿易

川北英隆

京都大学大学院  
経営管理研究部 教授

**日** 本の貿易が変動をきたしている。変動というよりも、構造的な変化が生じているとの表現の方が適切かもしれない。

図表は貿易統計での輸出額、輸入額、および「輸出－輸入」額の二〇〇〇年以降の推移を示したものである。輸出入には季節性が大きいため、図表は、当月を含む三ヶ月間の平均値としている。なお、貿易統計の輸出入の差額と、国際収支統計での貿易収支とは完全には一致しないが、おおよそ同じである。

この図表から明らかなのは、二〇〇八年のリーマンショックによって輸出入の差額が急激に縮小したこと、リーマンショック後に輸出の回復があったものの、二〇一二年の東日本大震災をきっかけに

輸出が減少気味であり、その一方で輸入が増えたことである。

この結果、大震災以降、輸出入の差額はマイナスが続いている。念のため、財務省が公表している季節調整後の数値を確認しておく、やはり輸出入の差額は昨年三月から「輸入超過」の状態になった。今のところ、その輸入超過額が減少に転じた兆しはない。

輸出入の差額がマイナスに転じた背景は何か。原子力発電が停止したため、火力発電用の燃料輸入の増大が大きな影響を与えているのは確かである。とはいえ、輸出が増加しないことも無視できない。

品目ベースで輸出入の増減の特徴をチェックしておく。

輸出では、電気機器が前年比マイナスを続けている。これは、テレビに代表される家電製品だけではなく、電子部品も同じである。全般的に日本の競争力が低下していること、生産拠点を海外シフトする傾向が強いことを指摘しておくなければならない。

輸入では、燃料の輸入の増大はもちろんのこと、自動車の輸入が前年比三〇％前後の増加になっていることに注目したい。国内での日本車の圧倒的優位性を



マーケット・アイ

## M A R K E T E Y E

脅かす現象である。同様のことは電気機器でも生じているようだ。

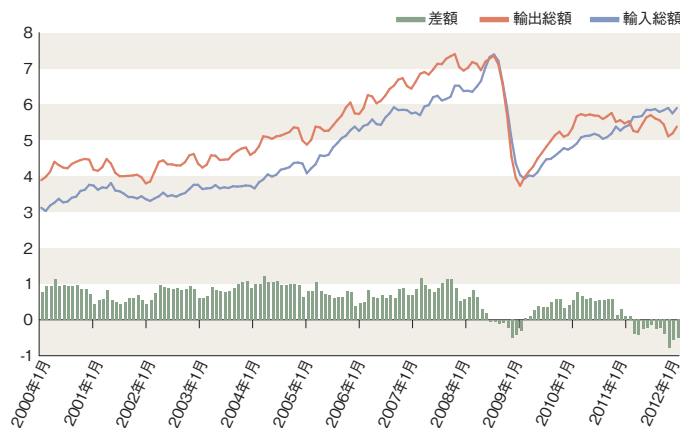
輸出入差額の黒字幅の縮小は以前から観察されていた。それが、リーマンショックと大震災を経て、一気に輸入超過の状態に陥った。二〇〇〇年代前半から中盤にかけての円安傾向が反転し、ドルベースで円が最高値を更新したことの影響も大きい。同時に、「メイド・イン・ジャパン」の神通力が減退している。たとえばスマートホンのように、インター

ネットの時代がブランドイメージに大きな変革をもたらしつつある。

輸出入の差額がマイナスに転じると、次は国際収支、とくに貿易

収支に主に所得収支を加えた経常収支が赤字に転落し、その結果、国内の資金需要を国内だけで賄いきれなくなるのではとの懸念が生じる。現時点での所得収支は、海外投資からの利息・配当・金収入が大きく、毎月二兆円強の黒字である。一方、輸出入の差額は五〇〇〇億円前後のマイナスである。つまり、貿

● 輸出入額と「輸出－輸入」額の推移



資料:財務省「貿易統計」に基づいて作成。

易収支よりも所得収支の黒字の方が大きく、経常収支も黒字である。とはいえ、内外の資金の流れは、基本的には貿易収支が形作る。それが赤字化しつつある現状は日本経済への警鐘かもしれない。貿易収支のみならず、経常収支も赤字に陥れば何が生じるのか。金利水準や為替レートがどうなるのか。将来を慎重に予測し、行動すべき段階に入ったようだ。